

巻頭言

精神神経学雑誌の刷新・発展に向けて

細田眞司 日本精神神経学会副理事長
Shinji Hosoda

精神神経学雑誌は、約120年の歴史を誇り、18,000人以上の定期読者を有する影響力の大きな雑誌です。しかし、近年投稿論文の掲載数が少なく、第121巻1号巻頭言で大森哲郎編集委員長が投稿を呼びかけられました。また、本誌は年来PubMed (National Library of Medicine, NIH, USの検索データベース) 掲載をされてきましたが、掲載雑誌の見直しで基準を満たしていないとの指摘を受け、改善されるまで掲載が停止されてしまうという事態が2019年2月から発生しています。

その主な指摘は、①雑誌の編集基本方針(スコープ)の記載がない、②英語抄録がないものが多い、③査読者が編集委員会内に限定されている、④国際的な査読者がいない、⑤図表が小さくわかりづらい、⑥投稿資格が会員に限られている、⑦オリジナルな論文の掲載数が少ないなどでした。

編集委員会では、この指摘を仔細に検討し、現代的な雑誌への脱皮を図ることを決断し、理事会にその刷新案を提出し、承認を受けました。

編集基本方針は「精神神経学雑誌は、精神医学、医療、保健、福祉の発展に寄与することを目的とし、これらの領域を扱う独創的な総説、原著、症例報告、討論、資料、特集などを掲載する。臨床研究に重点を置くが、臨床との関連が明確であれば橋渡し研究や基礎研究も掲載する」とし、精神科臨床を重んじる雑誌の性格を鮮明にしました。英語抄録は論文形式のものにはすべて掲載することにしました。

査読者も1名は、編集委員以外に依頼することに決定しました。それに伴い、会員諸氏にはピアレビュー(査読)をお願いしますので、ご協力をお願いします。

投稿資格について、PCN誌と同様に海外を含め会員以外の投稿を受け付けることになりました。

もともと、本誌は英文論文を受け付けてきたので、より門戸を広げ、雑誌の充実を図ることにしました。

本誌は、電子ジャーナル化を果たしており、多くの方々には電子配信で購読いただいておりますが、より読みやすく、図表を見やすくするよう検討に入っています。紙雑誌もA4判、現代的なデザイン、読みやすいフォントを採用

することなどを検討しています。

本誌は、本邦の精神科医のほとんどが購読し、精神科医療のあり方に大きく影響する雑誌です。学位論文のために投稿されることも多かったのですが、現在では英文誌が学位要件になる大学が多くなったためか、投稿論文が少なくなっています。実は、本誌は英文での投稿、掲載を認めた国際誌なのですが、和文誌と誤解されているのではと危惧しています。

昨年の新潟の学術総会への一般演題投稿を呼びかける巻頭言(第120巻10号)でも述べましたが、多くの臨床活動・経験・成果が発表され、相互に共有、検証することにより、精神医学・医療の新たな地平が拓いていくでしょう。本誌は、そのための重要なプラットフォームといえます。

論文を仕上げるためには、相当の労力が必要であり、しっかりと研究デザインを練って取りかかれないとありませんが、投稿を行う労力以上の実りを著者に与えてくれます。先行研究のレビューを行うことによって、医学的知見の現在の到達点を把握することができます。また、今までの自己の知見、経験を後方視的に調査することにより、課題を列挙できるようになります。そこから、デザインに基づき、研究を開始するわけですから、この研究的視点を持っていると臨床においてさまざまな気づきを得ることができます。ある分野を掘り下げて思索していると、なぜか他の分野でも興味深い知見を得る経験をするものです。さらに、症例報告をまとめる投稿を行うと、診療においても、患者さん、家族、スタッフの話をより丁寧に聴き、先輩、同僚からの指摘を大切にできるようになります。

学術総会、地方会で発表される多くの一般演題が論文文化されず、埋もれてしまわないようにしたいとの願いから、学術総会、地方会での一般演題から本誌への投稿に相応しい演題を選び、投稿していただく奨励賞を創設しました。多くの先生方が応募され、影響力のある本誌に論文発表されることを期待しています。

本誌がPubMedに再掲載され、多くの投稿、論文掲載される活気のある雑誌に発展することを切に願っています。